

公共空間領域とアート感覚

小松暁一・村井光謹・角谷 修

日本でも都市環境の整備や美化が進められてきたが、質的な高まりは欧米の都市と比べればまだ見劣りする現状でもある。

特に欧米と比較して日本の都市空間で最も見劣りするのは公共空間ともいわれている。

日本の公共空間は、今まで人の集散動線の処理や交通対策的なスペース、施設と言った機能性が目につき、環境の美化や、周辺の調和といった点に対する配慮には欠けていたようであった。

近年こうした現状に反省が生まれ、国や自治体や住民の努力で各地の都市で公共空間を美的に潤いのあるものにしようという試みが多く計画されている。

日本の都市の現状が貧しい原因の一つには、開発環境の中で経済効果を余りにも優先する短絡した考えが強く意識されたためといわれている。またその都市の歴史や文化に対する認識が住む人々に大きな資質を与え、価値観を抱かせることを忘れていたからともいえる。今こそ都市の公共の場における生活や環境に対する新しい断面を見出す必要がある。

建築と外部空間の結びつきは、切っても切れない関係が求められてきたが、現代の都市での建築の構築には周辺の環境や地域への貢献がかつてないほど強く求められている。それは都市において、ここの建物が街並を形づくり、人々の生活や環境に快適なイメージを与える鍵の要素となるものと考えられてきたためである。

都市の景観は、基本的にはそこに住む人々の美に関する意識が重なり合って造り上げられるものであり、都市景観が生活環境に秩序と魅力を求める以上、市民自ら創造に対して積極的な協力が必要である。

魅力ある都市には、背景となる自然や地形、建造物、街並、また歴史的に構築された遺産が積み重な

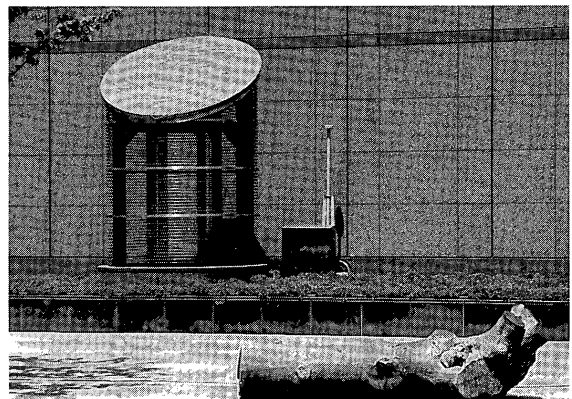
り厚味ある風景を形成していると思う。

金沢は、その要素や原形を今も残している貴重な都市の一つである。しかしこの背景に対し更に都市の生活を快適にしていくためには、人の五感に働きかけるような都市造りが一層と必要になる。

具体的には、豊かな緑や水の活用をもって広場や公園、街路といった公共空間の景観の形成が求められ、また伝統的芸術の土壌を考えると、アーバンアートにおける資質ある創造の提案も考えられる。また美しさを残す街並を訴求するため、快適なストリートファニチュアの展開も必要と考えられる。

生活環境の質的充実が求められている中で都市景観や都市個性への関心が高まり、「うるおい」や「豊かさ」、「らしさ」をテーマとしたまちづくりが各地で進められている。かつて縦割り行政といわれてきた自治体の対応も都市の景観自体、専門的な領域として捉えることの必要性から各現業部局における施策を複合的総合的な視点で捉え、相乗的に効果を高めるため各条例等施策面でも複合化の視点が大きに取り入れられるようになってきた。

一方都市の近代化は、都市空間から様々な「むだ」



ファーレ立川

を排除し合理的で高い機能を求める意識が、いつの間にか或る面でタイト化され、そのスペースには融通性がなくなり活動空間の考え方まで影響を及ぼしてきている。

都市を再び豊かな人間性を育む場とするためには、生活環境の棲み分け空間の活用と構造を考えられる都市のオープンスペースをデザインすることが大切である。

都市における個々の建物とか施設とかは、どんどん新陳代謝し変わっていても、都市の実体は残っていく。その都市の実体を支えているものは何かを考えると、道とか広場とかオープンスペースといった都市の隙間の空間である。都市とは、そのような空間に支えられており、都市生活は、その空間やスペースを介しての生活、即ちスペース・ライフこそ、これからの都市の豊かな活力につながるものと思う。

近年、パブリックアートをめぐる「公共」の問題がよく聞かれるが、新しい町づくり、再開発地、公園や公開空間などで、さまざまな展開が見られる。

パブリックアートの位置づけには、いろいろと視点があるが、ひとつは、作品が設置される空間である。しかし作品の形式や内容を問わず、公共の空間にあれば皆パブリックアートということになるのか疑問である。

美術館やギャラリーの作品をそのままパブリックスペースに持ち出せば、即パブリックアートになるとは限らない。この点を定義づけ論議する必要があるが、外国では美術館やギャラリーのアートに対して、都市空間（特に野外中心に）のアートをアーバンアートとも表現し、都市デザインのストリートファニチュアの基本となる快適な野外施設や景観と関わる機能性をもつ造形といった考え方が強い。

「パブリックアート」という言葉とその概念はアメリカで生まれたといわれている。1930年代ルーズベルト大統領によるニューディール政策がとられるが、以後、国や自治体が基幹施設である道路、交通機関、港湾、学校、公園などのインフラストラクチャーの再建にアーティストの力を積極的に活用することになる。

1959年、建築費の1%を美術装飾にあてる「アートのための1%法」がフィラデルフィアで制定されると、この反応が全国に広まり、自治体や企業をベースに特色のあるパブリックアート・プロジェクトが展開されていく。

ニューヨークのバッテリーパーク・シティ計画は、南マンハッタンの40ヘクタールに及ぶ埋め立て地を建築家とアーティストによって共同で都市景観をつくるためのプロジェクトがつけられた。職住一体の都市計画は1980年代に実施され、現在も工事が続行されている。

ワシントン州シアトル市でも1973年、パブリックアートについての法律ができ、市民の地域生活を豊かにするため建築家とアーティストが共同制作を企画した「シアトル・アーツ・コミッション」によって都市計画が進行された。

またミネアポリスでは、アートを都市景観に積極的に導入しており、中心街のモールをはじめ彫刻公園、歩道橋、噴水、ストリートファニチュアなどに影響をあたえ街づくりに深く関わっている。

企業のコーポレート・アートとしては、1970年ペプシコーラ社が本社をニューヨーク州パーチェスに移転した機会に広大な敷地に自社のコレクションからなる彫刻庭園をつくったが、この企画は多くの企業に刺激をあたえた。

フランスのラ・デファスは、1960年代より開発された地区である、企業のオフィスビル、ショッピングセンター、高層アパートの空間にパブリックアートの展開があるが、フランスでは、公共空間のためのアートの制作発注のことを、「コマンド・ピュブリック」（公共発注）といっている。1989年、革命200年の年に新凱旋門（グランド・マルシュ）が新たなシンボルとして完成した。

今や、美術館やギャラリーといった特定の空間に存在したアートは、社会性に意義を抱き広場や公園、さらに建物、歩道、橋といった都市のランドスケープを含みアートの舞台は強く広がりを見せている。

オリンピック（1992）で注目を集めたスペインのバルセロナでは、都市環境と芸術に、この機会を捕

らえ、更に意欲的に展開がなされた。

いうまでもなくバルセロナでは、ガウディやモンタネールらがモデルニスモの力強い造形運動に乗って、カタロニアの風土を代言する建築や美術全般のデザインを手がけ、都市計画を明確に性格づけることに力を入れていた。いらい今日まで伝統的環境を生かすだけでなく、コンテンポラリー・アートの創造を広域的に都市行政に展開するため努力を続けてきた。とくにオリンピックの開催にあわせての都市改造の計画には見るべき多くの環境への創出が目目された。オリンピック主会場のスタジアムの周辺はもとより、市内各所の公園や広場、道路等にもモニュメンタルな造形を恒久的に設置している。

その主要な地区だけでも、新しく開発された海浜公園、湾岸のバルセロナータ、モンジュイックの丘、北駅公園、シウタデラ公園、ミロ公園、カタルーニア広場、アルシーナ埠頭などのほか企業ビル、各美術館などがその対象となっている。

作品の設置空間の選定やデザインやその規模、量や大きさについても適切なアドバイスが求められ、単なる一過性の事業に同調させないで、あくまでも市民の生活や趣向に合ったエコロジー・ミュージアムの哲学を基本とした計画であった。また各専門家と連携してのチーム的作業が強く認識されている。

またバルセロナでは全市にわたって分布し、お互いに連動しながらも市民の生活機能や伝統の都市空間にも配慮された計画である。代表的なものとしては、モンジュイック広場にある電波塔（H50m）は、機能と美しい形態が一体になって造形美を空間に主張している。また国立宮殿の階段の中央に巨大で華麗な噴水を計画、夜になればライトアップされ、毎夜大交響楽とともに変幻自在なダンシング・ウォーターが芸術を楽しませ、両側にはシンメトリーに並ぶ噴水が視覚に心地よい感性として心に伝わってくる。このように、数々のアートは、都市の環境造形として水と緑の豊かなバルセロナの印象を深め、町に魅力をあたえた。

すでにバルセロナでは、1980年代後半より都市環境づくりに様々な試みが進められていた。この計画

ではバルセロナ市が民間の協力を得ることに努力している。その側面には、市民とのコンセンサスのもとで税金を使う配慮と新しい都市環境のあり方への認度を増す対策が考えられていた。

たとえば、都市と彫刻という運動も、ストリートファニチュアとして都市機能の中に内蔵する方向で、都市景観や環境に直接的な関わりをもつといったサイティッド・アート（心理学的な芸術）概念の出現である。

バルセロナでは都市の開発の上で常に話題となる縦割型を乗り越え、横断的な設計体制のもと歴史的遺産の継承を基本理念に、緑や水の要素を巧みに取り込んだ地域整備を優先とした都市の開発や再開発が進められた。

基本的にはランドスケープデザインであるが、技術的に各専門分野の協力を必要としながらも単一的なジャンルに特定できない表現の中に都市の環境造形の方向性を見出だそうとする考え方である。

都市計画家、建築家、造園家としての技術を基本とした考え方から解放された自由な発想への転換を実現化した計画であった。人々が快適な生活を共有できるという都市造りの基本原則が幅広く考えられ、これは人間と都市環境、特に公共領域での視点を問い直す大きな課題ともなった。

例えば、車の騒音や進入のない解放区を考え、露地や広場で人と触れあいながら歩く状景は、家並と共に町の文化の資質を改めて見直すことができる心の空間を作る目的とした。

今日の社会では車なしの生活はできないとしても、生活環境の一部に車の通行を分離した環境の空間づくりは、これからの街づくりの大きな課題でもある。

21世紀に向けて、どこの国でもどこの都市でも経済性の活性化だけでなくオリジナルで質の高い文化を背景にせねば、人々を引きつけ生活を満足させることができない時代が迫っていることを認識し、その対応を計画している。都市のスラム化や空洞化現象は、その必要性を強く物語っている。つまり都市の構造をもっと積極的に住み分けを図る計画である。

バルセロナでは、市民の多くは週末を自然の溢れ

る郊外で過ごすことが多いが、もっと都市の中での住み分け、過ごし方が効果的に実現化した生活を求めている。

その一つが公共空間における豊かなアート化であり、そして背景に緑と水の効用が強く具体化された環境、景観を大胆に取り入れが実施されている。

今、バルセロナで注目されている開発事業としてオリンピック事業で取り残されていた北部地区の整備として、ジュリアン街道が高速道路とぶつかるまで約1キロメートルのスペースをアートと緑のある公園と、道路を含む再開発が進められ、結果として交通施設の解決と快適な空間が出現した。並木のモールのなかほどに日除けのパーゴラが架置され、自然と遊び場のある公園通りともいえる。

美観面では統一感の他、大通りというコンセプトがキーポイントになっている。これは舗装、植栽、段面といったフォルム、また街灯、ベンチ、噴水といった機能がそれぞれ個性あるエレメントとなり、気候条件と都市の文化的背景によって選択された並木、さらに遊び場に敷かれた明るいトーンの人工芝によって調和を感じる環境演出がなされた。

非常に長い通りということで、エレメントには広いレパートリーが必要となっているが、この公園通りの起点と終点にはランドマークとして彫刻(鉄製)が2ヶ所ありバルセロナのシンボルタワーの一つとなっている

パブリックスペースとは、公園、広場、道路、橋などのほか公共施設の建物も含まれる。したがって公共の図書館、博物館、美術館などもパブリックスペースに存在する。企業の公開空間や大型の商業施設の公開広場などはパブリックスペースとはいえないが、行政、民間の両者が社会的空間として位置づけを認めた空間であるならば、公共的といった方が理解しやすいかもしれない。

アートは本来パブリックという概念とは逆で、造り出す造形に対して極めて私的な感情やパーソナルな思考や感情からの発想が強い為、パブリックスペースに設置される場合、抵抗感を抱くことも多い。しかし、その造形物が公の場に発表されることによ

てプライベートな領域に限定されなくなる。

環境芸術についても、作品のあり方を、単なる個別の造形として限定せずむしろ社会的な空間の中に解放し、より日常的なレベルにおいて捉えようとする考え方であって、したがって表現行為が特定のメディアにおける個性の主張という段階から人間生活を取り巻くありふれた普遍そのものへと拡大されるといった点で、現代文明の巨大な影を鮮明に意識することによって成り立ち、最も今日の造形観で美術の段階からデザインの段階へと推移することによって、日常生活とより結びついた造形の展開と思う。即ち社会的な空間の中に解放し、人間生活を取り巻く自然や文明の中に鮮明に意識した方が理解できると思う。

自然や歴史的環境を背景とする金沢のファクターを考えると、新しい味つけのイメージーションの展開を創出し、公開的空間アートにチャレンジしても不思議ではない。

いま造形感覚の高い金沢城の整備が注目されているが、この城石垣は金沢を代表するシンボルの一つでもある。

大手門にある尾坂門櫓の大石は見上げるような一枚岩で城内最大のものであるといわれている。二の丸の石垣も巨石で構成されている。

金沢城の石垣に使用されている石材は、近郊戸室山より伐り出された赤戸室石であるが石積みの技術には近江の石垣師穴生衆によって構築されている。穴生衆による石積みは、一見荒々しいが堅固で美的にも配慮された石積みとして知られている。

金沢には城趾以外にも、地形に生きる石垣、石積みが多く、地形空間に魅力ある視覚像として捉えることができる。城趾周辺や坂、用水、道路、緑陰空間、公共施設をベースアイレベル即ち鳥瞰的に捉え石積みの魅力と連動させることによって金沢らしいパブリックアートの創出が考えられるかも知れない。

近年都市空間の質的な充実を求める機運の中で、特に象徴的なこととして野外のモニュメントや彫刻、壁面、水などの芸術的アートの設置活動が注目されるようになった。

このような造形に共感を覚え、その実現を望む声も大きい。我が国の都市づくりにおいて景観や街並について論じられ強く意識されるようになったのは近年のことであり、まだモニュメントや修景造形などが都市の環境づくりに如何なる形で結びつくのかといった理念や素地づくりが充分と認識されていない、やや流行への安易な迎合が見られることも確かである。

モニュメントや野外彫刻の存在の歴史には、その時代の社会や思潮を象徴してきた。古代国家においては神や帝王の権威の象徴として、中世では聖者や宗教説話としての表現、近世では権力者の肖像性を、近代では芸術家、科学者など人間能力の賛美、20世紀に入ると抽象彫刻も登場し、都市の空間のモニュメントの様相は大きく変わっていく。

巨大な都市構造物の谷間であって、モニュメントや野外造形は無機的な都市空間への人間性の主張の代弁者としての役割を担っているのかも知れない。ようやく長期的な展望にたつて、都市づくりの中に時代の価値観の証しとして、また環境演出への一環として理解されつつあるのかも知れない。

社会的メッセージ、さらに政治的主張をもつポリティカルアートは歴史的に珍しいものではない。だが、そうした流れが新しいスタイルのアーバンアートとして前景化し、ひとつのパワーをもって空間の公共的性格をもちながら都市空間に姿を現すようになるのが1945年、第2次世界大戦後の頃になる。彫刻に革新を求め伝統的なアカデミックな再現主義から抽象表現主義や構成主義をもって近代に非再現的な形態へと変貌をもたらす。そして展開の場も建築物の外側空間を装飾する時点から都市空間の中に見出される環境に対して魅力的な場を求めた。

変化の原因は近代美術全体にも影響や動向が求められた。確かに、鋼鉄とガラスのオフィスの建物に取り囲まれた空間にはブロンズ製の騎馬肖像彫刻よりは適切な大きさで素材もそれに調和する抽象的な作品の方が似合う。もちろん再現的な彫刻はもはや現代的な環境に合わないということでない。

1960年代に入ると、わが国でも生活環境や都市の

あり方が論じられるようになり、野外の彫刻に対する意識も深まってくる。彫刻を都市に置くという運動が都市彫刻になり、加えてストリートファニチュアのような都市機能の中に快適な施設のデザインを求めるようになり、都市景観や環境に直接的な関わりをもつサイティットアートの概念の出現であった。

今日、街づくりを進める自治体では、その個性をアピールするためモニュメントや彫刻の発注が目につき、「街づくりと彫刻」「野外彫刻とシンポジウム」を含み目的を求め作品のコンペティションも行われている。

自治体が主催した1960年以降、先見的なイベントを通じ意欲的に都市空間への導入を図った主なコンペティションとして、真鶴国際彫刻シンポジウム、宇部市野外彫刻展、萩市国際彫刻シンポジウム、須磨離宮公園野外彫刻展、長野市野外彫刻展、金沢市野外彫刻展などが挙げられる。

仙台市では、けやきの緑に包まれた定禅通りには「杜の彫刻」をテーマとし、1977年に市政88年を記念し設置をスタートさせ、1988年の市政100年までに12体の彫刻が設置されている。

このように、各地での都市と芸術の出会いは潤いあるインパクトを与えているが、これらの彫刻は街路や広場、公園、庭園の点景として、また他の造形要素と一体になって修景効果を期待されている。

1989年、横浜港に面した13,000平方メートルの敷地に実施された山下公園の拡張と再整備計画は、パブリック・スペースの新たな提案として注目された。

山下公園に続く南端にある駐車場と水系ポンプ施設の上を整備し公園と連動させながら公園方向より上部スペースに向って大階段で直接つなげ、その中央には半円形の広場を設け、上部より流れる水路の接点に人工滝が置設されている。

さらに、上部空間にはコンパス広場が劇場を感じさせる構成とし、流れる水路には魚介類を彷彿させるデザインを導入、表現にはセラミックタイルによるモザイク仕上げは叙情的で、そのアート感覚は巨大なコラージュとなり港公園のイメージを一層高めることになった。

1995年10月に、立川市のJR立川駅北口に位置する旧米軍基地跡に計画された「ファーレ立川」は、都市計画とアート計画を結びつけるなかで大きく街の公開空間のあり方に新たな視点を提示したものと思う。

ここは住宅、都市整備公団による再開発事業で、7つの街区に10棟のインテリジェントビルが建設され、この街区を対象に企画されたものである。

プランナーの北川フラム氏は、コンセプトとして、ファンクション（機能）をフィクション（美術）に転化する目的には、機能的な新しい都市空間に、そこで働き、訪れる人の五感にささやきかける空間でありたいと述べている。

まず、陰影のある街をアート計画によって作り出す考えのなかで、この街区を「森」とし、「森」における生命の百相を現代の国際的情報にあふれた空間の中に置き換える試みである。また「森」のもつ生命の百相は、美術のさまざまな分野にまたがり、表現に対しても具象から抽象までに及び、多くの作品が、それぞれの個性をもって屋外に設置され、設置場所としての合意には時間をかけ理解を求めている。また立川市やビルの施主、設計者との話合いで、歩道、広場、換気塔、共同溝の入口、車止め、ビルの壁面、階段等と、日常生活の活動としての場の活用と平行するなかでヒューマンスケールを求めている。またこれらの作品は権威のある美術品でなく、触って楽しめる造形作品であり、照明器具やネオン管を用いて、昼と夜の表情の変化を求めると、「ファーレ立川」を歩いてみると、大きな道路やペDESTリアンデッキはもちろん、建物の陰になる分部にまで作品が入り込んでいて、オリエンテーリングの楽しみが感じられる。

この処、再開発が多くの都市で取り組まれ、都市機能における公共の概念が一步進められたことは確かである。また複数の土地所有者や建物所有者が共同でビルを建てる方式にも空間共用部分の領域に新たな理解を生む方向が示されるようになった。

またこうした理解によって生み出された公共的空間に表徴性を求め、彫刻、モニュメントなどの設置

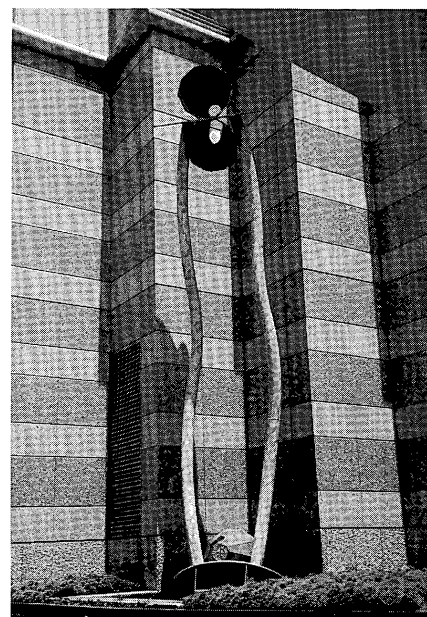
が計画されることも多い。しかし、これ等はまだ特別な場所、特別に用意された場所といった意識が先行していることもある。このような対応に「ファーレ立川」は一步踏み出した、街づくりとアートを一体化した試みともいえる。

都市にアートを設置するのでなく、アートを都市のなかで如何に活するかを考えねばならず、またそのような時代でもある。

ヨーロッパの都市等においては、古くから建物の外壁や屋根、或いは屋外の工作物に対し必要以上に神経が使われているが、これは街の景観を構成する重要なエレメントであるといった認識が持たれているためと思う。個人の欲求を抑え社会的ルールを守ろうとする考えは公共の概念を定着させ伝統的なルールの良さを今持って生活環境に持続させようとするコミュニティーの現れでもある。

一方、街と美術の一体化も、どこでも同じ考えでの創出は戒めるべきである。その土地と場面と風土に相応した固有性の追求が大切である。またアーティストの個性と街の特質をコーディネートするプロフェッショナルが当然、必要となる。

(平成8年10月31日受理)



ファーレ立川